

カガヤキ

暫定的補足表題「ウオラントス」
ラテン語でボランティアの意

No.67(2022.6.15刊行)、広報委員会編集
茨城県立図書館発行
禁複写転載©広報委員会

茨城県立図書館貸出図書に基づき

特集 ユダヤ教学術書籍の「書評」

宗教研究者(曹洞宗雲水)
桜井 淳

デニス・プレガー&ジョーゼフ・テルシ
ュキン『ユダヤ人はなぜ迫害されたか』
(ミルトス、1999)

神戸女学院大学名誉教授の内田樹は、
『私家版ユダヤ文化論』（文春新書、
2006）において、「理由はない」と結論
した。理由もなく、たとえ、理由があっ
たとしても、「ショア」（従来、ギリシ
ャ語に派生する「ホロコースト」が使用
されてきたが、その意は、「焼かれたい
けにえ」と言うユダヤ教にとって神聖な
用語であるため、最近では、ヘブライ語
で「大虐殺」の意の「ショア」を使用）
で約600万人も殺害されたならばたま
らない。必ず理由があるはずである。私

はそんな問題意識から文献調査を継続し
てきた。

この本は学術書である。この本を読
み、自身が頭の中に漠然と描いていた理
由をさらに発展させる糸口が分かってき
た。

「はじめに」において、「ユダヤ人の
歴史を通して最近までユダヤ人が確信し
てきたことは、ユダヤ人が嫌われてきた
のはユダヤ教がユダヤ人を特異な存在に
させ、かつ挑戦的に立ち向かわせたせい
であって、ユダヤ人が金持ちだったから
とか、手頃なスケープゴードであったか
らとか、あるいはいわゆるいじめに格好
の少数派であったからなどといった、ユ
ダヤ人であることとは無縁な理由によっ
てではないということです」(p.5)と記さ
れている。本論において、そのことを論
証している。

1章「ユダヤ人憎悪の特殊性」におい
て、「数千年の間、ユダヤ教は、神とト
ーラーとイスラエルという三つの要素か
ら成り立ってきた。つまり、ユダヤ人の
神概念、ユダヤ律法、ユダヤの民族国家
の三つの要素である。これらのいずれに
も示されるユダヤ人の忠誠心の厚さが、
反ユダヤ主義の最大の原因となってい
きた。忠誠心の厚さがユダヤ人をこれま
でアウトサイダーにし、もっとも重要な
ことは、それが非ユダヤの目に非ユダヤ
の神（神々）、法律、民族的信義の正当性
への挑戦であると映ってきたことであ
る」(p.18)と記されている。

2章「反ユダヤ主義の一原因（選民思
想）」において、「反ユダヤ感情をさら
に煽ってきたもう一つの信仰がある。そ

れは、ユダヤ人が選ばれた民であるということ、つまり、世界のあらゆる民の中から神はユダヤ人を人類への神の使者として選んだ、という信仰である。非ユダヤ人がはじめてユダヤ人のこの教義に気づいてから、つまり、聖書が非ユダヤ人にも知られるようになった時代から、選民思想は妬みと敵意を呼び起こしてきた」(p.53)と記されている。

4章「反ユダヤ主義の一原因(質の高いユダヤ人の生活)」において、「ユダヤ人の他に例をみないほどの知的分野での業績は、しばしば吹聴されるようにユダヤ人が生まれながらに格別に頭がよいためではなく、ユダヤ教の影響による以外の何物でもないのである」(p.70)と記されている。

7章「古代の反ユダヤ主義」において、「ユダヤ人がユダヤ教の実践をやめ、多数派の文化にもとづいた宗教を受け入れれば、ユダヤ人は迫害されなかった」(p.136)と記されている。

私には、以上の主要点を基に、『聖書』(ユダヤ教の『聖書』は『旧約聖書』のみ)の記載内容を吟味しつつ(マックス・ウェーバー『古代ユダヤ教』とシュロモー・サンド『ユダヤ人の起源—歴史はいかに創作されたのか—』も参照しつつ)、紀元前の迫害から「シヨア」まで考察し、原著論文をまとめることができる。

シュロモー・サンド『ユダヤ人の起源—歴史はいかに創作されたのか—』(浩気社、2010)

Shlomo Sand "When and How was the Jewish People Invented?"

この本はテルアビブ大教授のシュロモー・サンドが記した学術書である。それも、ユダヤ人の起源についての従来の学説を覆す主張であり、文献をていねいに読み解き、事実関係を積み上げ、主張内容をみごとに論証している。ユダヤ教やユダヤ人や『聖書』のバックグラウンドがなければ、的確に理解できないかもしれないが、社会科学的研究における論証の仕方とは、どのようなものであるかを認識するには、よい教科書である。

「はじめに—記憶の堆積と向き合っ—」には「ユダヤ系イスラエル人ならだれでも一点の疑念もなく知っていることだが、ユダヤの民はシナイ山でトーラーを授かったとき以来存在しつづけており、自分自身もその民の唯一直系の子孫なのである。その民はエジプトを脱出し、約束の地イスラエルを征服してそこに定住し、その土地の上にダビデとソロモンの輝かしい王国が建設され、やがてそれが分裂して、ユダとイスラエルの二王国が樹立されたことをもが確信している。・・・昨日のアイデンティティの悪夢は、明日は異なるアイデンティティの夢にとって代わられるだろう。流動的で多様なアイデンティティからなるすべての人間のあり方に倣っていえば、歴史もまた、変動するアイデンティティなのだ。本書で読者に提示する物語は、時の

深みのなかに埋め込まれた人間的・社会的な次元を解明することを志している」(p.49)と記されている。

「第2章神話=史」では、「「モーセ五書」を書いたのはモーセではなく、彼よりも数世紀後のべつの作者だったことは、火をみるよりあきらかである(バルーフ・スピノザ「神学=政治論」(1960)」(p.115)と記されている(学術的には、『聖書』は、資料集であるから、そうであっても、特筆に価することではない)。そのことは、『聖書』の「創世記」の記載内容がモーセの時代には知りえなかった数世紀後の事実関係(アッシリア王国やバビロニア王国)が記されていることから証明される。

同章には「カナンは「エジプト脱出」が行われたとされる紀元前13世紀には、なお、全能のファラオの支配下にあった。したがって、モーセは解放された奴隷をエジプトからエジプトへと導いたことになる。聖書の記述によると、彼は60万人の戦士と300万近い人間を40年間も砂漠のなかを引き連れた。これほどの規模の人口が居住地を離れ、これほど長い期間、砂漠をさ迷うのはまったく不可能だという事実のほかに、こうした出来事があれば、何らかの碑銘学的ないし考古学的な痕跡を残したにちがいない。エジプト王国では、個々の出来事をきわめて正確に記録に残す習慣があつて、帝国の政治・軍事活動について数多くの文書をわれわれは現に手にしている。王国の土地に遊牧民の羊飼いや集団が侵入したことまで記されている。問題は、そこに住んで、反乱を起こしたであろう、ある

いはいくつかの時期にそこから脱出したであろう「イスラエルの子ら」に関する典拠や暗示が一つも見いだされていないということだ・・・想定された時代に相当規模の集団の通過を証言する遺跡は、これまでのところシナイ砂漠のなか発見されていないし、有名な「シナイ山」の位置もまだ「発見」されていない(pp.188-189)と記されている。

この本の内容は、伝統的な『聖書』や「ユダヤ学」の研究をしてきた者にとつては、大変ショッキングなことである。この本は、ユダヤ人の起源の研究には、欠かせないが、私が研究しているユダヤ人迫害や「ショア」の構造分析には、不可欠の文献ではないと位置づけている。しかし、認識しておいた方がより深みのある考察ができるように思える(学術的位置づけとしては、政治的意味合いが強いため、いまのところ仮説と受け止めた方が無難である)。

ルーシー・S・ダビドビッチ「ユダヤ人はなぜ殺されたか」(明石書店、1999)

Lucy S. Dawidowicz, "The War Against the Jews 1933-1945"

この本は、米イエシバ大教授のルーシー・S・ダビドビッチ女史による「ショア」についての学術書であつて、デニス・プレガー&ジョーゼフ・テルシュキン『ユダヤ人はなぜ迫害されたか』(ミルトス、1999)やシュロモー・サンド『ユダヤ人の起源—歴史はいかに創作さ

れたのかー』(浩気社、2010)のように、古代から現代までの歴史的考察ではない。こ

この本では、「ショア」(欧州やソ連邦のユダヤ人881万人の76%に当たる593万人を殺害された大虐殺)に対し、「ナチによるユダヤ人への戦争」(p.13)と定義している。この本を読んでも、「ショア」の政治構造は、分からず、ユダヤ人迫害の歴史構造は、まったく分からない。

米国では、この本を基に、テレビ番組「ホロコースト」が制作され、大反響があったとされているが、これまで読んだ文献間の矛盾からすれば、この本には、部分的に、基本的な重要な問題において、真実と異なる記載があり、とても、そのまま、受け入れられない(たとえば、pp.217-218に記されているガス殺の犠牲者数など)。学術論文には文献として引用できる価値がないように感じた。

編集後記

県立図書館ボランティア通信紙に
おける書評の位置づけ

今回の特集記事の意図は、県立図書館のボランティア通信紙に特徴を追加するための試みです。ボランティア全員に対し、原稿をまとめやすい条件を示すことであり、その具体例は、県立図書館の新刊だけでなく、既刊の書籍の「書評」を掲載することです。分野は、問わず、深い考察の「書

評」に期待します。

私のユダヤ教研究のいきさつ

今回は、ひとつの例として、私の研究分野の「ユダヤ教」についての既刊の学術書の「書評」です。ただ、書きやすい分野を選択しただけです。

私は、宗教研究者(曹洞宗雲水)ですが、最初から仏教学ではなく、東大大学院人文社会系研究科を志願した最初の動機は、最も古い学問を修めたいと言う考えからであり、最初に考えたのは、ソクラテス(古代ギリシャ哲学者、BC 470-399)の考え方をまとめたプラトン(古代ギリシャ哲学者、BC 427-347、ソクラテスとは生きた時代が26年間しかオーバーラップしていない)の研究でしたが、さらに遡り、『旧約聖書』(Old Testament)の研究、それを聖典としているユダヤ教(Judaism)まで遡ったためです。

しかし、日本には、ユダヤ教の修行の場としてのシナゴグ(Synagogue、集会所の意、ギリシャ語のシュナゴグに由来、『聖書』には「会堂」と記載)が広尾と横浜にしかないため、通うことができず、フィールドワークとして、それに匹敵する厳しい戒律を維持している曹洞宗に出家し、共通部分の修行に励みました。ですから、第三者から見れば、話の流れからすれば、「風が吹けば桶屋が儲かる」的な無理なこじつけです。

私の研究分野は、「中世ユダヤ思想」ですが、「比較宗教学」(主要な全宗教の考察)と「宗教社会学」も収めました。

桜井 淳